

漢法苞徳塾資料	No. 140
区分	基礎理論・津液
タイトル	津液について②
著者	八木素萌
作成日	1991.01.10

◎津液は生理的に活性状態に在る液状成分の事である。

①飲食物の摂取によって、吸収されたものから体内で生成されるものであるから、消化吸收を担っている消化管の機能状態が良好であることが要求される。

a. 「先天の元氣」が「三焦」機能を介して「腸胃」を良好に機能せしめていると言うのが『難経』の思想である。この考え方に従えば

- [1] 「先天の元氣」を主る『腎』と、それが他の臓腑を機能させるために機構となっていると考えられている『三焦』と、この二つが『腸胃』の機能の良好さを保証するとして扱われているのである。
- [2] 「六腑」の機能は、良好な状態に在れば「運降通下」も正常に保たれ、「上逆」は起こらない。『難経』四十四難の「七衝門」の内の「会厭・賁門・幽門・闌門・魄門」の五門は、まさに「運降通下」の正常さを保つ為の具体的な機構となっているが、中でも特に重要な役割を果たしているものが「魄門」である。『難経』三十五難で六腑の功能と、別名とを記述したのち、「下焦ノ治ムル所ナリ」と結んでいるが、「魄門」の開闔を主るのが『腎』であるとか、「糟粕」を引き下げようように作用しているのが『腎』である等を記述している『内経』の思想とも符合している。
- [3] 「先天の元氣」を蔵し主るものは『腎』であると言うのは漢法医学の世界では周知の事であるが、『腎』はまた「水」臓として身体に於ける「水」機能の中心となっている。『津液』問題における『腎』と『腎の腑』である『膀胱』が重要な訳である。
- [4] 『陰』といわれる時には、極めてしばしば「津液」「血」を意味している場合があるが、飲食物が「精」と「糟粕」に分かれ、「精」（飲食物のエキス）は「血」「津液」「精」（腎精の事・精力と言う場合の精・精がつくの精）になり「陽氣」を生み出す力・五体を養う力として機能している。この「飲食の精」を「四布」させているのが『脾』である。
- [5] 「上ニ行ッテ脈ニ入り血ニ変ズ」るのであり、「津液トナッテ膀胱ニ蓄ヘラレ」るのである。この『膀胱』の「水」は「氣化」作用を受けて「溺」（尿）として排泄され、「氣化」作用を受けて生理的液性成分となって働くようにされるのである。この「氣化」は「氣」を主っている『肺』を中心とした「氣」機能である。また『膀胱』の「津液」を「蒸」して、体を「温煦」する「衛氣」に換えるものが『腎』『三焦』の『相火』である。『腎』のこの側面は『腎陽』『腎の命火』などと呼ぶ。

[6] 『脾ノ四布』が十分に伸びやかに作用する為には『肝』の「条達」作用の力を借りる必要がある。

[7] 以上のような相互的な作用と機能によって、『津液』は五臓六腑を潤し養うのであり、皮毛腠理を濡潤し養うのであり、『衛氣』は体を「温煦」し、『玄府』を開闢され、『守邪』作用が担われているのである。

②津液は血や精に転化し五液になり気にもなる。

a. 五液

肝の液→泪
心の液→汗
脾の液→涎
肺の液→涕
腎の液→唾

b. 「腎ハ液ヲ主ル」のであるから、「五液」の変動は『腎』 = 『水』 = 『寒』に関連している『五臓』の変動であり、『津液』変動である。例えば、『泪』は『肝ノ液』であるから、『泪』が乾燥するとか出て困るとか、粘るとか、等の変動は、『寒冷』に邪による『肝』の変動か、『腎』を犯す性質の情緒的問題や『腎ノ主ル』身体的機能の変異が『肝』に影響しているか、である。

③『気化』作用が良好でなければ津液は正常に流行し機能する事が出来ない。

a. 「気ノ臟」は『肺』であり、「肺ハ皮毛腠理を主サドル」「肺ハ水ノ上流」「肺ハ肅降ス」など、『肺』の正常さは「津液」を停滞させない為の必須条件である。「カゼ」気味のときには微かに浮腫が見られることから了解できよう。

b. 李東垣は「夫レ元氣・穀氣・榮氣・清氣・衛氣・生發諸陽ノ上升ノ氣コノ六ハ 皆飲食胃ニ入りテ 穀氣ノ上行ナリ 胃ノ異名ニシテ 其ノ実ハ一ツナリ」「胃氣升ラザレバ 元氣生ゼズ」とも断じ、また、「陽氣は胃の気なり」などと断じているが、「穀氣」の摂取と「四布」とは『脾・胃』の役割であるが、「穀氣」が「元氣」または「陽氣」に転換する仕組みの問題はまだ展開不十分である。

『三焦』の「相火」と『腎陽』の「相火」とによって『津液』の「蒸化」による「気化」の転換と、このように生成された『衛氣』または『陽氣』を全身に「輸布」せしめる機構が在るのである。

④津液の生理的病理的異常には停滞と涸燥とが在る。

◇津液の停滞

a. 津液の停滞には浮腫と痰飲（飲）がある、つまり、皮下などの身体組織での停滞（浮腫）と、消化管などの管腔での停滞（飲・痰飲）と、があるのである。

b. 津液停滯には外因・内因・不内外因があり、

〈イ〉外因では「六因」の全てが関与するが、「湿」と「飲食・労倦」や「寒」などの陰邪によるものが多い。「風」や「暑熱」もあるが、「風」は『肝』の条達機能を妨げたり、『肝』実が『脾・胃』を抑制したりする、「暑熱」は「気」を耗散させるために『津液』の「気化」作用が不足する事になる為である。

〈ロ〉内因によるものは、「七情」の乱れが「気」の「下陷」や「耗散」や「沈滯」を招くので、津液の「気化」や「流行」などの不全を来すのである。

〈ハ〉不内外因による場合は、「房勞」は「精脱」に由来する「気不足」となり、「飲食労倦」では「穀気」不充と「消耗」による「気不足」の為に、引き起こされる「津液の停滯」による「浮腫」が大部分であるが、他は「血脱」「邪気停留」による経気閉塞」「気耗散」「血滯」などの局部的のものからの影響や広がりであり『瘀血』を伴うもので、いわゆる「腫脹」であり「炎症」である。

c. 津液停滯の病証では

〈イ〉痰飲の内停の場合、咳嗽して多痰であり、呼吸がせわしなく或は急迫したり、頭暈目眩（めまい）し、心下部に動悸したり、或はまた、脇下が脹満し、咳して唾のような痰がきれにくくて痛みを覚えたりして、この場合には脈は弦で、舌苔は白滑となる。

〈ロ〉全身的浮腫や足背浮腫や腹部膨満鼓（蠱）脹などの場合、足背に浮腫が出たり、顔も手足も身体も全身に悉とく浮腫したり、或はまた、単に腹部が太鼓のように腫れる鼓脹となる、脈は沈弦となり舌苔は膩または白滑であったり、或はまた、舌質の色は淡く又は暗紫になったりする。つまり水腫鼓脹の証であり、慢性気管支炎・肺性心・腎炎・耳下腺症・肝硬変の腹水症などに見られる。

〈ハ〉病因病機

多くは肺・脾・腎の水液輸布とか排泄障害とかが起り、水分代謝が紊乱されているのであり、この為に痰飲が停滯したり水分の貯留が起こったりしているのである。

〈ニ〉治療方針は

〔1〕「通陽化飲」つまり陽気の通行を良好にしてやって「飲」を正常な津液に変化させると言う方針で、「脾陽」の「虚衰」を主とするもの（苓桂朮甘湯）と、「脾運不振」つまり「脾」の「運化」機能を賦活させる事を主とするもの（実脾飲）に大別されている。

〔2〕「利水消腫」つまり水分の流行を改善してやる具体的には主として利尿してやって腫脹を消亡させるという方針で、「実脾利水」つまり「脾陽虚衰」によって「脾」の「運化」不良が水湿と身体に貯留させるために生起するに至っている浮腫であるから、これを改善することによって利水消水

しようと言うもの（実脾飲）。

「通陽利水」つまり「陽気」の運行を改善する事によって「肺気」の「肅降」機能と「膀胱」における「気化」改善とによって「利水消腫」を図ろうとするもの（五苓散）。

「温腎行水」の法つまり『腎陽』の不振の為に「化水」「水津の気化」不全が起こり浮腫となっているものは、「温腎」によって「水津の気化」による「行水」つまり水分代謝と水気の流衍との改善を企てて治療しようとするもの（濟生腎気丸）、等の三種である。

d. 津液停滞に用いる主な薬方

〈イ〉 苓桂朮甘湯・実脾飲

〈ロ〉 五苓散・濟生腎気丸

〈ハ〉 薬味では、

桂枝・半夏・細辛・干姜・茯苓・白朮・陳皮……温化痰飲剂

車前子・猪苓・沢瀉・大腹皮・五加皮・茯苓皮・胡蘆壳など……利水消腫剂

◇津液の涸燥

a. 津液の涸燥には外因・内因・不内外因があり、

〈イ〉 外因

異常な乾燥や高熱の環境の為に発汗の大過や多尿などで津液が失われる為に引き起こされる。

〈ロ〉 内因

肺・脾・腎などの機能に障害が有るために津液の生成が不十分であるなどによる津液不足の成起であるか、大出失血・激しい嘔吐・ひどい下痢・大発汗・異常な多尿・高い発熱によって津液が消耗耗傷された等による。

〈ハ〉 不内外因

外傷（骨折・擦過傷・切創傷・熱傷など）による大出失血と脱精の大過などが津液の不足を引き起こしたもの。

b. 津液涸燥の病証では

〈イ〉 口渇し心臓不安感じる・咽が乾き唇や舌も燥いて唾液が少ないとか乾いてしまっている・皮膚も乾燥しひどい場合にはヒビ割れるに至る。或は、下肢が萎え弱る・或は、小便がチョロチョロと少なく・大便は水分欠乏に為に秘結する、脈は多くは細数である。

〈ロ〉 またこれ等の症状とともに、呼吸が浅く短い・無気力で何事も億劫がる・舌の色調が淡く舌苔は乏しいか全く無くて光滑であり・脈は虚で無力である。これは、津液不足であると同時に気不足でもある「気陰両虧」の状態である。急性

胃腸カタル、白血病、急性伝染性疾患などの時に見受けられるものである。

〈ハ〉 病因病機

多くは大発汗・失血・嘔吐・下痢・多尿などによったり・高熱の為に津液の消耗損傷が起こっているのである。或はまた、肺・脾・腎の機能低下や不全のために津液の生成が障害されているのである。

〈ニ〉 湯液の場合

薬味では：生地黄・麦門冬・玄参・石斛・花粉・甘黍汁・梨汁・西瓜汁・
玉竹・北沙参など

処方では：増液湯・五汁飲・生脈散の類

増液湯は津液不足の状態の場合には通用する処方である。熱邪により津液が傷損されている場合には清熱剤を加味し、腑実による場合には承気湯の系統と合方したりする。五汁飲は熱邪が胃の津液を傷害している場合に、この処方の甘寒生津の作用が用いられる。また飲料に代えて用いる事もある。生脈散は益気生津の作用があり、気と陰と両者ともに傷損されている場合に用いられる。

未完